百瀬の滝を登りなば　　忽ち竜になりぬべき
　わが身に似よや男子と　空に泳げや鯉のぼり

　春まだ浅き信濃路、三分咲きの桜の花の下、
長野県立松本深志高等学校、学生通用門、通称「登竜門」を通って街から野から山から新入生たちが三々五々集まってくる。いがぐり坊主頭あり、おかっぱ頭の女子学生あり・・
皆それぞれ「最高の学問を修めよう」と心に秘めて・・
　竜門の滝を乗り超えた鯉はやがて竜になって天に昇る・・
１９６０年の春である。

生徒たちの姿は千差万別、制服もこれと言った決まりがあるわけでもなくみんな思い思いの服装や履物で登校してくる。といっても戦後の復興時代が終わったばかり、ろくに着るものもなく、中学生時代の学生服で急激にはちきれんばかりに成長した體をかろうじて包んでいる者あり、兄や姉のおさがりのセーターを着ている者あり、運動靴の者あり、下駄や高歯をカラコロさせて歩く者あり、リュックサックで通学する者あり、風呂敷で教科書をくるんでぶら下げて歩く者あり、とにかく何でもありの時代だった。
付けて加えて、旧軍思想の「一億総」の教育に懲りてそれに反発することが制服排除の根底にあったようだ。しかし、記念集合写真撮影のときだけはそれなりに取り繕って男子学生は学生服をみんなで使いまわす。

またこの高校では教師を呼ぶときに「〇〇先生」とは言わずに「〇〇さん」とさん付けで呼ぶことが昔からの習わしらしい、そんな呼び名で教師のことをさん付けで親しげに語るとき新入生の誰しもがちょっと背伸びをして大人になったような気がするのが不思議だ。
後に映画「さよならクロ」で有名になった校内に紛れ込んできた黒犬の名前も、最初は学生に人気のある教師の小松教頭・矢島五郎・内山袈裟一さんらの名を借りて‘赤城の山も今宵限り‘よろしく「小松五郎袈裟一」さんなどと・・
さん付けで教師を語るせいか、仇名を持つ教師は皆無、中学時代ほとんどの教師がろくでもない仇名で呼ばれていたのとは大違いで何か異次元の世界に紛れ込んだ気がしないでもない。どうやら教師にこの学校の卒業生が多く、さん付けが先輩への尊敬の念の裏返しということで仇名の無い理由のひとつのようだ。
それでも、仇名が皆無というのは間違いで、何人かの教師は仇名を持っていた、マッチョで筋肉自慢の体育学教師のターザンなど・・
あともう一人仇名のある教師がいた。
それが地理の教師の丸山さん、膨大な資料を小脇に抱え、大きな体を少し前のめりにさせ額で風を切って勢いよく教室に突入してくる。最初の授業の時、鼻の穴を膨らませ本人の口から、得意げに・・

「私の教える学問は人文地理、私は人文地理の丸山で、ひと呼んで『ジンマル』・・」。
黒板に「Human geography」と書きなぐり、地勢と人間とのかかわりを解明するのがこの学問だと、この学問を好きになってほしい、そして親しみを込めてジンマルと呼んでほしいと。
このようにおのずから自分の仇名を売り込んでくる教師もいた。
誰が決めたわけでもないのだが、多分出欠を取るときに教師が目だけを動かせば済むためだと思うのだが、暗黙の了解で教室での生徒の並び順はアイウエオ順に並ぶのが常で、ア行の「有賀武夫君」は常に教室の前の席でハ行の福島君は常に後ろの席に座ることになる。
教壇から遠くなるほどに注意力は散漫になりやがては若さゆえ眠気を催すことも多々ある。
「今や地球規模で石油・石炭などの化石燃料は枯渇しつつあり、もってもあと数十年、人類は早急に代替燃料を探さねばならない、例えば風力とか・・原子力とか・・」
ジンマルさんは力説する。
前の席で熱心に授業を受けていた「有賀武夫君」はやがて日本のエネルギー確保のために原子力の世界にと歩を進め、後ろの席で居眠りをしていた福島君は原始の世界へと。

講堂に大きな額が飾ってあり、幾分古びているのだが墨痕鮮やかに「自治」と。
旧制松本中学の初代校長小林有也の書である。
これが校是であり、何者にもなびかずに自分で自分を管理せよ、自分の考えを大切にせよと。
入学して一ケ月、アカシヤの花が冷たい雨に打たれる日が続き、国会前では「日米安全保障条約」批准反対のデモが続き、日本中がこの話題で沸き返っていた。
我等も授業を午前中で終わらせ、千人以上の学生が昼過ぎから講堂に集まり、学生大会で安保問題を研究討論することが日常の行事となっていた。
結論から言えば、有志学生が「日米安保条約批准反対」のプラカードを掲げ松本市中をデモ行進しようということになり千人以上の学生が参加することとなった。
しかし、学生らしく整然とシュプレヒコールは無しの無言行進でと。
校長はじめ教師の皆さんが授業時間を流しての学生大会をはじめ松本市中をデモ行進するまでの一連の流れを学生の自治に任せ見守っていたことには今でも驚きを隠せない。

さて、無言でのデモ行進なのだが、ひとの関心を引くものでなければ意味がない、ただの集団散歩で終わってしまう。そこでいつも教室では後列に座っている数人が企んだ、腰に荒縄を巻き荒縄の先には数個の空き缶を縛り付け、これをカラカラ、ガラガラ引きずって歩くのだ。舗装道路を引き摺ったり市電の線路に触れる大きな音に誘われて何の騒ぎかしらと街の皆さん窓から扉から首を出すことになる。
これを見た前列組の有賀君、
「えっ、それって、ありかい？」
シュプレヒコールはしてないぜ、無言、無言。
「なるほどねえ・・考えやがったなぁ・・俺にもひとつ」とニヤリ。

これがどの程度の効果があったかどうかは不明なのだが、安保条約をどさくさ紛れに批准に持ち込んだ岸内閣は間もなく終焉を迎えることになる。

郷友会コンパという集まりがある。
同じ中学校の出身者が集まる会なのだが、街場の大きな中学校からは３０名とか４０名も一度に入学してくるので歓迎コンパも３学年合わせると総勢９０名とか１２０名などとなってしまい当然の結果結びつきも希薄で、出身中学校の教室や講堂を借りてお茶とカリントウとお説教くらいで済ませてしまう。
ところが、大糸線・篠ノ井線・中央線など鉄道通学の安曇野・大町・筑北・木曽路・伊那路などの学生たちは数も少ないので結びつきが強い。
各地区の公民館などを借りて年に数度も集まるようで結束も堅い、特に新入生に対しては「悪さ」の洗礼を受けさせるのが松本中学時代からの習わしの様だった。
「おい、有賀、昨日の穂高のコンパどうだった、いっぱい飲まされただろう？」
「え？なに？なにを？・・そんなの何処で誰がやってるんですか・・いやいや、為になることばっかりでみんな大人しいもんだったねぇ」と、とぼけられてしまう。

二年目のクラス替えと福島君が山岳部に入り山に狂っていたので有賀君とはそれ以降会う機会がまったくなくなってしまう。
三十年後、
東京の同窓会で久々に会った往時いがぐり坊主だった有賀君は堂々たる体躯の原子物理学者にと変身していて押しも押されもしない竜に登り詰めていた。
言葉つきも洗練されていて、
「キミ、今、何をしているの？・・・ア、そう・・ペンションねぇ・・」
そのときの会話を覚えていたようで、
毎年のように田植えの時期になると、穂高の実家に義理を果たしていたようで、行きかえりの途中に奥方が作っている玉葱をぶら下げて我が家を訪れるようになる。
そして大いに盛り上がり夜が更ける。
一度だけあのでかい図体の有賀君が縮こまる事件があった。
例によって有賀君が我が家を訪れた時、
折り悪しくこれまた深志高校の同級生の H 君が母親らを連れて我が家に宿泊していたのだ。
「ちょうどいいや、なぁ有賀、H と一緒に飯食ってくれや」。
H 一家と同じテーブルに着いた有賀君、図体が段々縮こまっていく。
お得意のヴェルレーヌの放吟もなし。
「どうしたんだ？」
「ちょっと、トイレ・・一緒に来てくれや」
「なんなんだ？」

「まずいよなあ！Ｈさんは中学の一年先輩だし、お母さんは俺の中学の先生だったし・・」
「そりゃあ、面白れぇや！！」
「他人事だと思って・・」
分厚い唇が泣きを見せる・・

３・１１の地震のあと、
１０日ほど経ってライフラインが復活したようで日立在住の有賀君から連絡があった。
「俺の家はすぐ横の川、目の下まで津波が上がってきていた・・が、何とか無事だ。
それより、福島原発はヤバい！！・・東京・千葉・埼玉・神奈川に孫が住んでいたらすぐに疎開させろ！それから、これからは玉葱はなしだ。先行き短い俺は平気で食うが、お前んとこは客に出す可能性があるからな」。
原子物理学者のありがたい情報、身に染みてお受けいたした。

上海の５日間は楽しかったなぁ・・
２００５年秋、有賀夫妻、私とウチのカミさん４人で中国の旅をした。
初中国で観るもの聞くもの動くものすべてに興味津々の有賀君。
真理探究・研究熱心、学究肌の彼、質問攻めで中国人ガイドを独り占めにするなど・・
ちょうどその時、上海に留学中だった袖山君夫妻と合流、
有賀夫妻、我ら夫婦六人で一夜の大宴会。
あれやこれや様々な情景が今でも頭に浮かんでくる。
北京は一度行っておいた方がいいよ！歴史的にも政治的にも・・
といった私の言葉を信じた有賀君、間もおかずに北京を奥方連れで訪れたようだ。

そして２０２３年・・
暮れも押し迫ったある晩、つくば在住の小松君から悲報が届いた。
「有賀が・・」
「え！？・・なんで？・・」
信じられないし・・信じたくない。
茫然自失、砂を嚙むような日々が続く・・

年があらたまって、有賀君の奥方から電話をいただいた。
やはりこれが現実なのだ。
認めざるを得ないのだ。
誕生日の朝倒れ、翌日にみまかった・・たった一日だけの７９歳・・

彼を偲びながら今これを書いている。

ウチで披露してくれるはずだった「紅葉狩り」が聴けなかったのが唯一心残りだ。
Covid１９で会うことができなかったこの数年間も悔やまれる。
もう一度ヴェルレーヌが聴きたかった。

思い出は尽きないのだが、
いつか向こうで有賀に対面し、
黄河だろうが揚子江だろうが飲み干すほどの勢いで酒を酌み交わすのが楽しみだ。
登り竜じゃなくって虎になっちまうか・・

取り敢えず今は冥福を祈る。
迷わず昇天していてくれ。

２０２４．１．１４．